

一次の文章は生物学者である筆者が、2015年に母校の高等学校で行った特別授業の記録をまとめたものの一部です。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

十年ほど前のある会議で、これからの小学校教育には英語とコンピュータが欠かせないという話になりました。私もこれからの社会では英語もコンピュータも大事だと思えます。でも小学生の教育として①それが②サイユウセンとは思っていません。コンピュータを小学生に教えて、何が出来るようになるのですかとうかがったところ、例えば株価の動きなどがわかるとおっしゃったのです。それで私は、小学生だったら株の動きがわかる前に畑のカブのことがわかったほうがいいかなと、その会議でつぶやいた(笑)。しかられるかと思いましたが、やはりどこかでみなさんも、そういうことは大事だと思っていらっしゃるらしくて、新聞に書くよう求められました。

③その記事を読んだ福島県喜多方市の市長さんが、実際にやってみましょうとおっしゃって、喜多方市の小学校に農業科をつくってくださいました。農業科では年に十三時間、農業の授業があります。近くの農家のおじいさんやおばあさんが子どもたちに一生懸命教えてくださっています。その過程を一つ一つ伝えると長くなるので、一年かけて一生懸命いろいろなものをつくり、最後に書いた作文を紹介④します。三年生です。

「僕は枝豆をつくりました。シャワーのような水やりがとても楽しかったです。枝豆に大きくなれよと話しかけました。農業はさ⑤い高⑥です」

じつはこの子はちよつと④ナマイキに、なんで農業なんかやらなければいけないんだと言っていたのが、実際にやったらちよつと変わりました。⑤私が気に入っているのは「枝豆に大きくなれよと話しかけました」というところです。枝豆って、みんなにとってはお父さんがビールのおつまみにしたり、大好きですよ。スーパーマーケットにあるときは商品ですね。でも、この子にとってはこの枝豆は生きものでしょう。大きくなれよと、赤ちゃんに言うように言っています。自分で育てると「生きもの」になるのです。

四年生は、

「学校で採れた野菜を家に持ち帰ったとき、家族がすごいねと笑顔を返してくれました。一生けん命育てれば育てるほど、おいしい野菜になり、みんなの笑顔が増えるなんて、<sup>⑥</sup>野菜づくりにはすごいパワーがあるとと思いました」

野菜を持って帰ったら、お母さんが「よくできたわね」と言っ、おいしい料理にしてくださいました。それを「おいしいね」と言っ、みんなで食べます。つくるとききの苦労話も出るでしょう。野菜がみんなをつないだのです。家族みんなの笑顔が増えたのです。すばらしい。

喜多方は福島県ですから、五年生はこのようなことを書きました。

「<sup>⑦</sup>原発事故のせいでせっかく農家の人が苦労してお野菜やお米をつくったのに<sup>⑧</sup>出荷停止になったというニュースを何回も見ました。喜多方のお米は安全で、すごくおいしいです。福島県へ来る人が増えるといいなと、この米づくりで思いました」

みんなが原発事故のことをよく考えなければなりません。新聞で読んだりニュースで知るのももちろん大事ですが、自分でお米をつくってみたら、こんなにいいお米ができたのに、放射能という問題が起きたために、食べてもらえない人が近くにいることになんとも言えない注不条理さを感じたのだと思います。体験をもとに自分で考えているのです。喜多方は放射能の問題はありません。でも同じ福島県でだめだと言われていることが、とても悲しかったのです。社会の問題を自分のこととしてよく考えています。何か教えられて考えたのではなくて、自分でつくっているうちに自らそういうことが考えられたのですね。自然と問いが生まれたのです。

次は六年生の作文です。

「私たちが育てた小豆<sup>あずき</sup>を使って赤飯をつくり、一人暮らしのおじいさんやおばあさんに配りました。泣いて喜んでくれた人もいて、そのことが心に残りました」

今、日本は高齢社会<sup>こうれいしゃかい</sup>です。お年寄りが増えています。歳をとると、なかなか若い人たちのように元気にはなれず、できないことも多くなってきました。家族が亡くなって一人暮らしになってしまいう人も少なくありません。おいしいご飯づくりもなかなかできな

いときに、子どもたちが自分でつくった小豆でお赤飯をつくり、どうぞと持って来てくれたら本当にうれしいでしょう。子どもたちの方もどこからか買ってきたものを届けたのではなく、一年間、自分が一生懸命育てた小豆でお赤飯をつくって、お年寄りに届けられたというのがどれだけうれしかったか。農業は一年かかるのです。すぐにはできません。けれど、それを大事に続け、収穫ができ、人を喜ばせることができるのはとてもすばらしいことです。

すべて喜多方の大人と子ども、みんなが実感したことですけれど、じつは私の提案でこういうことができ、よかったという気持ちもありました。ところが校長先生が⑨冊子をくださいました。「僕たちは二十年、こういうことをやってきたのです」と。農家の人たちが子どもたちにとこから来るかわからないものを食べさせるのではなく、自分たちで育てたものを食べさせたいと思い、毎朝給食のためにお野菜を届けてくださっているのです。二十年も前から。これって大変なことなのです。

喜多方市が「給食に自分たちのところで作ったものを子どもたちに食べさせたい。お米もみんなそうしたいと思います」と決めるのは、いいことだと思ってしまう。でも最初は、「政府が決めたお米を給食で使わないのなら、⑩ホジヨキンは出しません」と言われました。

ここで喜多方市の方たちがすばらしいと思うのは、教育委員会と保護者と市が、三分の一ずつお金を出し合い、ホジヨキンなしで給食を進めたことです。二十年も前に、生きものとして生きるとは、食べ物を大事にすることだということを、具体的に示したのです。みんながそれを普通にやっているのがすばらしいです。

私もときどき行って一緒に給食を食べたりしますが、この間はトウモロコシを採りました。採れたてのトウモロコシを皮をむいてそのまま食べると、本当に甘くておいしいのです。東京育ちの私には、生まれて初めての体験でした。喜多方は会津塗りという漆の器で有名です。漆は「Japan」と言うぐらい日本の大事な工芸です。みなさんもお正月に、おせち料理やおとそを飲むときに使うでしょう。でも、大事にしないといけないからふだんあまり使いませんね。ところが喜多方では会津塗りを使っているのです。「せっかく日本の文化のあるところなのに、合成の器で食べていたら、おいしく食べられない」と言って、子どもたちが扱ってもいいような漆器をつくったのです。私もこれを買ってうちで使っています。とても使いやすくすぐです。子どもたちが扱っ

てもよく、丈夫じょうぶなうえに漆の美しさはあるのでとても気に入っています。このように毎日の生活を大事にして生きていくことが大事です。喜多方の人たちの生き方はとてもすてきですね。何よりも生活者でありたいと思います。毎日、お日様が昇のぼるように一日をちゃんと生きるのです。当たり前だからこそ難しいし忘れがちだけれど、こういうことが大切な生き方だと思います。

〔知の発見 「なぜ」を感じる力〕中村桂子

注 不条理・・・正しい論理に合わないこと。

問一 — 部① 「それ」の指示内容を書きなさい。

問二 — 部②・④・⑧・⑨・⑩の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直しなさい。

問三 — 部③ 「その記事を読んだ福島県喜多方市の市長さんが、実際にやってみましょうとおっしゃって、」とありますが、「市長さん」はどんなことを「実際にやってみましょう」と言ったのですか。十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 — 部⑤ 「私が気に入っているのは『枝豆に大きくなれよと話しかけました』というところです。」とありますが、(1) 「私」はなぜ『枝豆に大きくなれよと話しかけました』というところが「気に入っ」たのですか。解答らんに合わせて五十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問五 — 部⑥ 「野菜づくりにはすごいパワーがあると思いました」とありますが、筆者は野菜づくりにどのようなパワーがあると考えていますか。文中の語を使って、十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問六 「の」「五年生」の作文に書かれている思いを筆者がどうとらえているかを説明した、次の文の空らんAとCに入る最も適切な言葉を、それぞれ指定の字数で文中からぬき出しなさい。

この生徒はコメ作りという **A** (二字) をもとにして、「原発事故」という **B** (五字) を、 **C** (五字) としてよく考えている、と筆者はとらえている。

問七 — 部⑦「原発」とは何を省略した言葉ですか。元の言葉を漢字六字で書きなさい。

問八 — 部⑩「僕たちは二十年、こういうことをやってきたのです」とありますが、「二十年」どういうことをやってきたのかを、文中の言葉を使って三十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問九 筆者が、この授業を通して高校生たちに伝えようとしていることを、文中の言葉を使って六十字以内で書きなさい。ただし、「大切な生き方」という言葉を必ず使って書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

このページには問題はありません

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈中学二年生の加奈太は、夏休みに天徳島で行われるキャンプに参加していた。六名の参加者のうち、光圀、ミラクルの二人とは打ち解けていたが、海江田を中心とした、大垣、栗木のサッカー部三人のグループとは互いに反発していた。加奈太ちはテント設営をどちらがやるかを賭けた勝負に勝ったが、サッカー部三人がテント設営をしていたところを手伝った。〉

「おい、川口」

海江田がミラクルの名前を呼んだ。はじめてのことだ。海江田は、居心地悪そうな顔をしている。

「なんや」

「もう一回、走りの勝負してくれないか。頼む」

海江田が頭を下げた。①驚いた。ミラクルは、腕を組んでなにやら考えている。

「ええで。でも条件がある」

「なんだ」

〔注〕タカさんが言つとつたやろ。バディ組むつてな。おれが勝つたら、バディで行動しようや〕

②びっくりしてミラクルを見た。バディなんて冗談じゃない。みんなそう思ってるはずだ。

「わかった」

海江田が言った。大垣と栗木が嫌そうにため息をつく。おれも大きく息を吐いた。海江田からの条件はなかった。純粋に、もう一回ミラクルと勝負がしたいのだろう。

ミラクルと海江田がスタンバイする。さつきと同じように、光圀と大垣がスタートラインに、おれと栗木がゴールラインについた。





になった。隣の海江田と目が合うと、険しい目つきでこつちをにらんできたけど、ケンカしたときのような憎たらしい感情は、もうおれのなかにはなかった。

「お腹減ったよ」

光圀の腹がタイミングよく鳴った。

「昼飯、どうする？」

海江田にたずねると、「カレーでいいだろ」と、注<sup>2</sup> 仏頂面で返ってきた。

「カレーなら⑦カントンに作れるな」

大垣が言い、そやな、とミラクルが応じた。

「カレーならおれも作ったことある」

栗木もうなずく。

六人でぞろぞろと炊飯場すいはんに戻り、昼食の準備をはじめた。カレーのルー、じゃがいも、にんじん、たまねぎ、鶏肉とりにく。まさにカレー用の材料がそろっていた。タカさんは、自由に作っていいと言っていたけど、カレーにすることは最初からわかっていたのかもしれない。

「牛肉じゃないのかよ」

栗木の言葉に、みんなが同意するようにため息をついた。おれはちよっとおかしかった。はじめて六人で気が合ったのが、カレーの肉についてだなんて。

誰だれからともなく、バディ同士で動きはじめた。

（この後、光圀と栗木が材料を切り、ミラクルと大垣は米を炊き、加奈太と海江田はスープとサラダを作り……、と六人は作業を分担してカレーを作った。）

「超絶<sup>ちようぜつ</sup>うまそうじゃん！」

栗木が叫び、みんなも鼻の穴をひくひくとさせた。さつそく盛り付けて、木のテーブルに並べる。カレーライス、サラダ、スープ。レストランで頼んだら、八百八十円くらい取れそうだ。カレーは照りがあって、いかにもうまそうに見えた。

「誰か、なにか言えよ」

席についたところで、海江田が言う。

「なにかって、なんだよ」

おれが問い返すと、「いただきますの挨拶だよ！」と半ギレされた。おれは、笑いそうになったのを堪えた。

「じゃあ、食事番長の平林が言えよ」

栗木が言う。食事番長という言葉に、またもや笑いを噛み殺した。栗木なりの褒め言葉かもしれない。

「ぼくでいいの？ わあ、うれしいなあ。じゃあ、みなさん、手を合わせてください」

みんな、素直に両の手のひらを合わせる。

「天徳島の神様、どうもありがとうございます。カレーを食べられることに<sup>⑧</sup>カンシヤします。ではみなさんで、いただきます！」

「いただきますっ！」

申し合わせたわけでもないのに、みんなの声がそろった。流しこむように、カレーを口に運ぶ。

「うまいっ！」

誰かが叫び、そのあとは、うまい、おいしいの連発だった。

(中略)  
ちゆうりやく

スープは、まあ、ふつうにおいしかった。海江田と目が合って、<sup>⑨</sup>互いに少しほつとしたような顔を見せ、<sup>しゅんじ</sup>瞬時に気まづくなくて同じタイミングで目を逸らした。

なんとなくバディ同士で片付けをして、終わったあと、またなんとなくみんなでテーブルについた。ちよつと憎たらしい感じと、ちよつとうれしい感じが心のなかに同居している。そして、ちよつと照れくさい。

「午後からどないしよかー」

ミラクルが言う。<sup>⑩</sup>おれは、改めてミラクルの態度に感心していた。なにげなく行動に移したり、言葉に出したりするのが、どれほど難しいことなのかはわかつているつもりだ。ミラクルは、何事も相手に負担をかけずに、あくまでさりげない。おれがやったら、<sup>注</sup>卑屈な笑顔をばらまくだけのわざとらしい態度になってしまうだろう。

そんなことを考えながら、じつとミラクルを見ていたら、

「なんや、加奈太。なんか言えや」

と、矛先を向けられてしまった。おれは少し考えてから、

「<sup>⑪</sup>アツいから、泳がないか」

と、提案した。つめたい海に入って汗を流したい。

「それ、いいな」

栗木と大垣が、ぼそりと順繰りに言う。

「ぼくはうきわで浮かんでるよ」

光圈は、にこにこ顔だ。こんなふうには、素直に気持ちを顔に出せる光圈もすごいと思う。いつの間にか、特に中学に入ってから、おれは本当の気持ちを隠すことに<sup>⑫</sup>慣れてしまった。サッカー部トリオも同じだと思う。かっこつけて気持ちを隠しているうちに、<sup>⑬</sup>それが本当の気持ちかわからなくなつて、<sup>⑬</sup>硬い鎧を脱げなくなつていた。光圈を見ると、その鎧がどれだけかっこ悪くてダサイことなのかが、よくわかる。

注1 タカさん・・・このキャンプの主催者しゅくさいしやで、加奈太の父の友人。

注2 仏頂面ぶつぎげん・・・不機嫌ふきげんそうな顔。

注3 卑屈ひくつな・・・自分を低く見せ、相手のご機嫌取りをするような様子。

問一 — 部①「驚いた」とありますが、「加奈太」は誰が何をしたことに「驚いた」のですか。三十五字以内で書きなさい。(句

読点は字数に入れます。)

問二 — 部②「びっくりして」とありますが、「加奈太」はどうして「びっくり」したのですか。五十字以内で書きなさい。(句

読点は字数に入れます。)

問三 — 部③・⑦・⑧・⑪・⑫のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問四 — 部④に当てはまる人物名を本文中からぬき出しなさい。

問五 — 部⑤「大垣がため息をつき、栗木は神妙な顔をしていた」とありますが、二人のこの時の気持ちとして最も適当なもの

を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 再び勝負を挑いどんだにも関わらず負けた海江田に、心底失望している。

イ 勝負の結果を受け入れることができず、ミラクルに反感をいだいている。

ウ 勝負に負けた海江田が怒りを表すのではないかと海江田をおそれている。

エ バディで行動するのはいやだが、負けた結果を仕方なく受け入れている。

オ 勝負に負けたので加奈太たちにバカにされるのではないかと不安に感じている。

問六 — 部⑥「光圈」は、この文章においてどのような人物として描かれて<sup>えが</sup>いますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア マイペースで、周りの人のことを全く気にかけない、わがままな人物。

イ 温和で、周りを気にせずに自分の思ったことを正直に言動に表す人物。

ウ プライドが高く、周りの人々と気軽には打ち解けられない人物。

エ 気が弱いがやさしく、細かなところにまで気配りのできる人物。

オ おだやかに見えるが、負けん気が強く、意志が強い人物。

問七 — 部⑨「互いに少しほっとしたような顔を見せ、瞬時に気まづくなって同じタイミングで目を逸らした」とありますが、この時の二人の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 二人で作った料理がおいしかったことに安心して相手の顔を見たが、さっきまでケンカしていた相手であることを思い出して腹立たしく思う気持ち。

イ 二人で作った料理が思ったほどはおいしくなかったので、責めるように相手の顔を見たが、相手を責めるのは間違っていたと自分の考えを後悔<sup>こうかい</sup>する気持ち。

ウ 二人で作った料理がおいしかったので、自分のおかげであると主張するために相手の顔を見たが、自分の主張を子どもっぽく思い、恥<sup>は</sup>じる気持ち。

エ 二人で作った料理が思ったほどはおいしくなかったので、相手の様子をうかがおうと顔を見たが、ケンカしていた相手に気にする自分をなさげなく思う気持ち。

オ 二人で作った料理がおいしかったことに安心して相手の顔を見たが、さっきまでケンカしていた相手と同じ思いであることに気がつき、落ち着かない気持ち。

問八 — 部⑩「おれは、改めてミラクルの態度に感心していた」とありますが、「加奈太」は「ミラクル」のどのような態度に「感

心」したのですか。四十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問九 — 部⑬ 「硬い鎧を脱げなくなっていた」とありますが、「硬い鎧」を「脱ぐ」とはどういうことですか。二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)